六　日本の一大危機「元寇」

―一所懸命に戦った肥前の武士たち―

東松浦郡肥前町の星賀の松山に太刀神社があります。太刀神社には何本もの木刀が奉納されています。これらの木刀は、元寇と関係があるそうです。

元による侵略を六回も受けた高麗（朝鮮）は、一二七三年に完全に屈服しました。そして、その翌年の一二七四年（文永十一）十月、元軍は日本への侵攻を始めたのです。五日に対馬が、十四日には壱岐が侵略されました。壱岐が占領されたという知らせを受けた九州の武士たちは、博多湾岸を中心に警備を固めました。その中には、肥前の国（佐賀県・長崎県）の御家人や松浦党と呼ばれていた武士団もたくさん含まれていました。

太刀大明神（館神社）
丘の上にあり、伊万里湾を出入りする船を見渡すことができる。

松浦党の佐志房は、自分の領地内である星賀に元軍が上陸して来たという知らせを聞くと、三人の息子（直、留、勇）と共に現地に駆けつけたそうです。佐志氏親子は大勢の元軍を相手に※一所懸命に戦いました。しかし、矢もなくなり、刀も折れて、壮絶な最後を遂げたそうです。無念の死を遂げた佐志氏親子の霊を慰めるために、地元の人々が神社を建てたのでしょう。地元の人々が願い事をする時に、木刀を奉納する習慣が残っています。

佐志氏以外にも数百人の松浦党の武士が、戦死したり、捕らえられたりしたそうです。また、玄界灘沿岸

の農漁民も壱岐、対馬と同じように侵略を受けたという記録が残っています。神集島（唐津市）の住吉神社や加部島（呼子町）の田島神社にある元軍碇石などは、元軍の襲来を示す証拠かもしれません。

元船は唐津湾の沖を東に進み、博多湾に集結しました。そして二十日の早朝、約三万三千人の元軍は上陸を開始しました。海岸付近で待機していた武士たちは応戦し、激戦が展開されました。その様子は、竹崎季長絵詞（蒙古襲来絵詞）に、いきいきと描かれています。

この季長の命の恩人は、肥前の御家人白石通泰です。

季長は領地を奪われ、裁判中の身でした。したがって、自分と二人の家来、それに姉の婿とその家来の合わせて五人だけで参陣していました。手柄を立てれば、自分の領地が返ってくるかもしれません。それで、だれよりも先に敵を攻めようとしました。まさに一所懸命です。

先駆けに成功した季長でしたが、いきなり窮地に立たされました。武士の伝統的な戦い方である一騎打ちで臨んだ季長に対し、元軍は集団戦法でかかってきました。ドラを打ち鳴らす音に馬が驚き、さらに「てつはう」が破裂すると、爆音と閃光でショック状態になりました。毒を塗った矢が雨のように降り注ぎ、馬や季長の兜、肘、足などに刺さりました。もうこれまでかという時、白石通泰が百騎を連れて駆けつけたので、窮地を脱することができたのです。

竹崎季長絵詞（蒙古襲来絵詞）（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）
左は、肥後の御家人竹崎季長の頭上で「てつはう」が炸裂している。「てつはう」とは、火薬を詰めた鉄球に火をつけて飛ばす武器。右は、肥前の御家人白石通泰の援軍が駆けつけてきている。

松浦党の諸氏や、龍造寺氏、多久氏、千葉氏、白石氏など肥前の武士たちも、筑前や肥後、豊後や薩摩の武士たちと共に奮戦しました。しかし、多くの武将が次々と戦死していきました。例えば、石志（唐津市）の地頭石志兼の息子二郎、山代（伊万里市）の地頭山代諧、有田究、相知勝などです。

日本軍は、元軍の新しい武器や集団戦法に苦戦を強いられ、夕方には大宰府まで後退しました。博多の町は炎に包まれました。

夜になると、元軍は船に戻っていきました。その夜、強風が吹き荒れ、高麗（朝鮮）の人々に命じて急いで作らせた船は、その多くが沈んだのです。また、沈没をまぬがれた船も急いで高麗に引き揚げていったので、日本軍は勝つことができました。これが、文永の役です。

肥前町星賀の石塁
右奥に見えるのが鷹島。右下は生ノ松原（福岡市）の石塁。

文永の役の翌年、一二七五年の四月、元の使者五人が、フビライの「服従せよ」という内容の手紙を持って、長門（山口県）に来ました。元の使者は鎌倉まで連行され、龍の口という所で執権の北条時宗の命令により、処刑されてしまいました。鎌倉幕府は、元に降伏せず、戦う意志があることを示したのです。

一二七六年の三月には、元軍の再来に備えて博多湾沿岸などで石塁の建設工事が始まりました。九州や中国・四国地方の武士たちが、その領地の面積に応じて区画を受け持ちました。肥前の武士たちは、姪浜（福岡市）一帯に石塁を築きました。完成した後も、交代で姪浜の警備にあたりました。

一二八一年（弘安四）五月下旬、元軍が再び侵攻してきました。高麗を出発した元の東路軍四万人は、まず、対馬と壱岐を襲いました。六月、博多湾に侵入してきた元軍は、志賀島や能古島（福岡市）を占領し、それらの島を足掛かりとして、上陸を試みました。しかし、石塁を築いて防御を固めていた武士たちの奮戦により、上陸をあきらめました。文永の役の時に苦戦を強いられた武士たちは、敵が苦手とする海上で、積極的に攻めました。岡本長繁（七山村）や草野経永（唐津市鏡・浜玉町）は、大矢野氏（熊本県）らと共に小船に分乗し、志賀島に停泊していた元船に夜間の攻撃をしかけました。

陸と海からの攻撃を受け、戦況が不利であると感じた東路軍は、中国から来る江南軍十万人と合流するために壱岐に引き返しました。ところが、江南軍の到着が遅れ、合流地点は平戸（長崎県）になりました。六月末に合流した元軍は兵十四万人、船四千四百艘という巨大なものでした。しばらく休憩をとった元軍は、七月の下旬になると船を東に進め、伊万里湾の入り口にある鷹島（長崎県）を占領しました。鷹島では多くの住民が殺されました。ところが、その数日後、台風が接近し、元軍の将兵が船と共に沈み、生還者は三万数千人だったそうです。鷹島周辺の海底には、今でも元軍の遺品が眠っています。

元寇より七百年余りを経た現在、鷹島町は、フビライと関係の深いモンゴル国のホジルト市と姉妹都市関係を結んでいます。鷹島には町営のテーマパーク「モンゴル村」が設立され、モンゴル国との友好親善に役立っています。

鷹島の海岸から発見された
中級指揮官の印（青銅製）
（鷹島町教育委員会蔵）
「管軍総把印」